富士太鼓

特別
チ12
3656
34

412
J656
34

宮内省図書寮

おこゝ社い蔵座院よ院うへまゐ
殿下なわさても内裏よ七ゆ
宗孤乃侍座人玉る天王るよわ
あさくまのとり樂人こゝ社いなるひ
なきさ太鼓打上をみてん成め
上ぎゝまき太鼓乃役を仕人所よ
住吉よわ冨士とり樂人こゝ社も

是殷乃上を引てしゐ笑殷乃
後成金屋上わて山は山由ゆ名き
富士湖畔何まも面白き所なわ
きらめこ谷〳〵花きの谷小流落なる
――――――――
あさまの嶽もゆるといへい
詞
富士の煙乃うひやなうらうと
きく可いかうへなるか

なわとも湖畔いまのさうけると
和歌あるまるよるわ金二〳〵富士と
ゆものもあく人湖畔山由をゆ
小くき富士の振舞うあとては
宮所よ押よを移んあう富士成
討てん湖よ不便乃次第まてしゐ
ゆの越るわ社なきるい人まる

も一首歌集にはしこうこと侍

はるかはきりやと春人　雲井上

第六二

かきたるぐ富士乃姿を

歌集　是ハ伊乃國住吉乃樂人

富士と中人のたまやすとん

さても内裏乃七ゐ位紫殿乃

まゐまはるよわ天王さるよ里

樂人吾き集ふ由をきゝ乃ふり

妻も居殿乃役世ゑ淀乃書き

金三ドさんそめるよ所へ上ま

表乃百姓愛心よ乃月乃面

ト書

方を志ゑ福乃波とあうゝき

ふゝ乃表　祝ゝ祝ぬまゝ

おゝひゝ淀ゝく雲井やゝ

旅てハあとなれや住吉乃松の
ひさしさわなりむ遠ハ月落かゝる
山城もりや千鳥ハ笠をぬさ
ハ幡よ新星うけおひ乃むすふ
契り養なりてう淺くよあふや
下
男山都よりやく慕ふ名わく
早詞
富士乃ゆゑとやハ何くふきう

上詞
色よ人　早詞　ねは延いかの為何すれ
遊里かう　上　恥かしなかりし妻や
子ゝまて汝　中　なすふ富士いうさまて
汝よ　上　何とかしい詩まうると
くゝや　早　中ニ我す富士い淡雪よ
詩まうてかう　上上　されいきかう思ひ
あをえをし愛我うし重てとはく

上月

中々に浅間は詞もあさけなく
さらしも似たうき富士はなまと煙
とはなすわぬりも見へハ数々にそ
うひもあさき詠よ残る思ひ子を
あらうりふいとし狩りしむ渡ハ
き義あへハ　とハ類てもりひ
なまる事ふてハ見ようみ許

象形栗衆たよう形人形数ふは
形見よのゑうる事あし思ふを
思へし心を慰めうへ　ときのそハ
行ゑもえしぬ歌人乃くもハ哉
田舎の老と思召似ふと思ひ
しま漢ふ京きとわうふとの
月ゆきかりしぬ将夜乃うらふ

所もあるいはさう痛りしやは人
出行ひしと義見川りしりやう
天王寺の楽人ハめしみてよわ
くわ清方ハ勅諚なるよおして
家重ハ下として上をさうるよ
仰たる旨しそうへ清方ハ當社
地讃乃楽人まそしめ神よ仕へ

下句

うへハなまみ金の本へまゐそと
やし我気ぬ新まそ出行ひし
そ面影ハ方まそへとまことの
主ハあきは訪志形見ろ由なき

上言

りうてわかくゑへ来ぬと思ひ
おハぐ志うこうり年をへし
さんしふり波まそもと母へ来の

ものをゝ更まよのこゝろなるぬ身を
こゝろ　　こゝろ
恨ゝこのこゝち歎くゝうあいれなる
こゝ　　こゝ
歎くゝうあいれなるわゝる　あゝ
ゝめゝやゝゝゝ姫あまゝ妻乃
ゝゝきれんゝやいきゝゝゝ
あまゝいゝ太敷ゝゝてゝゝゝゝ思乃
あまゝわゝ情心ゝゝたまゝすゝなゝ

下　　ゝ　　ゝ　　ゝ
妻ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝゝて乃人のゝゝひゝやあゝて
ゝの　　ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝも太敷ゝゝたゝゝゝゝゝきい
ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ
太敷なゝわゝたゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝゝゝ　　実理なゝわゝゝゝゝゝゝ
ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝゝゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝゝゝも太敷ゆゝきゝゝゝ

秋乃うきうちて脈を
つゝれ面　ワスハウ為ふは
妻子歟ゆゝしや於ちりん誤せよ
男乃紫指衣よ　袖乃くなれや
香甲　脈乃歟対おゝめ　殺を
岩よ　理まんとて　すりるや
開ふ色そこ　秋乃風より

上花

なぜ　うしやくとをめ殺
蕪和ちわ子ふ　言やか　殺も
思ハい服ちやゝぐゝゝうる
紫よ引替て心言葉も及れぬ
ゝ亀雲来ふ　ゝと乃て由なの
脈やゝとうしと是殺ふるや
おゝるそちを　ゝ如と定めく

雪嘉乃かのかい衣敷に燈火に
天乃あうまさい雪に上人の
富士に乃よたえにもまゝて
赤豆に播四方へ作と数かと
花衣さくもひくもも
作人の春なまいい衣敷乃屋くい
春もわゆゆう糸に計さむ

二ロン手地

ゆたゆたなる乃
きりやなる乃
女人乃悪心ハ影乃雲
時て云ゆ楽を打へ　備羅乃
衣敷ハうちやさぬ君に後
子秋楽とうふよ　さてまさ
ちよや第代とたさもきうへて
安楽よ　衣ゆ楽敷うたふよ

日の暮るようとふきぬぐ山おろし
嵐を誘ひ来てまのひきあれ葉の
多く焼しやときうい思ふ歟い
うちたまきうとまきそ言かやつて
すゝ世我ゆはけるくむ乃煙
富士の根ミ成りをい焼うう
うへなるまはきはもとなわや

人くよう〳〵脚中てさ〳〵そ雪
作人乃為香かゝとゝ皆ぬきれて
我心乱髪乱髪かゝ歟おもひい
わす神〳〵と又点雲太敷うう
うきひとのふあとミなわはきと
見をきそうう人へ見るあとミ
かきそう鬼見る歟

6